夕陽の訪問者

秋子は、二十年間住み続けている白壁の三階建てマンションを気に入っていた。三ＬＤＫのゆったりした間取りは、どの部屋にも光を取り込む窓があって、廊下を南北に風が吹きぬけマンションにありがちな閉塞感はなかった。それぞれの出窓に飾られている鉢植えは、かつてヨーロッパを旅したときに見かけた絵画のような街並みを彷彿させるものがあった。都心から一時間ほど離れた私鉄の沿線にある小さな駅から歩いて一〇分、スーパーや商店街も近くにあるわけではなかったが、散歩コースにはバラ園があったり、市のボランティアの人たちが植えたというアジサイの小道があったりで、遠くに見渡せる雄大な山々も田舎風ではあったがのどかであった。子供のいない夫婦に一戸建ての家は必要がないという同年輩の夫の意見で、五十に手の届く年齢になって勤務先に便利な都心のアパートから郊外のこのマンションに引っ越してきたのが二十年まえのことである。

何事も夫に従っていれば間違いはなく、専業主婦として疑問を持つことも無く、取

り立てての趣味もなく過ごしてきたのだが、定年をすぎてまもなく、老後を旅行などで共に楽しむはずの夫は胃がんを患って半年の闘病生活の末に亡くなってしまった。たった一人残された秋子にとってまさしく人生の想定外の出来事で、しばらくは呆然として遺影の前で涙を流していた。しかし、三ヶ月、半年と過ぎていくうちに、誰もがそうであるように心身ともに立ち直り、マンションの玄関前に捨てられていた猫を拾ってきて飼いならし、それなりの平和な生活を取り戻すのに一年もかかったりはしなかった。薄茶色の、トラ模様の毛並みを持つ子猫は平凡に「トラ」と名づけられ、秋子の日々の無聊を救ってくれた。トラはおとなしい性格でよくなついて、いつも秋子の足元にじゃれ付き、猫をかわいがることがこんなにも幸せなものかと、何事も猫中心の生活になってきていた。

マンションの廊下やリビングは毛足の長いベージュ色の絨毯が敷きつめられていた。引っ越してきた当時、その高級感が一番のお気に入りで、毎日二回掃除機で埃を取り払って新しさを維持するように努めてきた。掃除大好きで夫のためにいつも玄関やリビングに季節の花を絶やさなかった彼女だが、猫を飼ってみて薄色の絨毯を清潔に保つことの難しさを痛感した。トラを戸外に出すことはなかったが、玄関のゴミを身体

につけて、絨毯のうえで背中をこすり付けると、あっというまに薄ねずみ色に汚れてしまう。あわてて掃除機を取り出す。日に何度も繰り返す。猫の毛が絨毯の毛足の中に混じりこんで取れない。掃除と格闘していたが、あるとき床をフローリングに変えることを思いついた。

いくら高級であっても二十年も使い古した絨毯である。子供もなく、大事に扱ってきたといってもリフォームする時期にさしかかっているだろう。フローリングは掃除も簡単だし見た目にも清潔である。夫が亡くなってから初めての一大事業であったが同居者のトラのためにも決断することにした。

今までは何もかも夫任せの生活であった。数年前のトイレや風呂の改修の時は夫が業者を連れてきて指図をし、秋子はお茶の支度をするくらいでニコニコと見ていればよかった。初めて自分の采配で業者を選び、工事の指図をしなくてはならない。彼女の住むエリアにも様々な建築会社はある。しかしどこにすればいいのか、見当もつかない。迷っているときに新聞の折込広告で、「リフォーム、なんでもやります」という見出しが目に入った。「クロス、フローリングの張替え、キッチン、風呂場、トイレの改修などあなたの要望にそって格安で応じます」とある。「有限会社イースト」の広告

はいかにもお粗末なＡ４の紙にパソコン打ちしたような簡単なものだったが、隣接する市にあり、「格安」というふれこみが気にいって電話をして見ることにした。

二、三日後に「有限会社イースト」のひょろりと背の高い若者がやってきた。工事人といえば日に焼けた筋骨たくましい容姿が頭にあったので拍子ぬけした。室内に案内して、六畳の和室とすでにフローリングが敷かれているキッチンは別として、リビングや四、五畳の書斎、ベッドルーム、廊下などを木目調のフローリングに張り替えて欲しいと注文した。「後藤高志」というありふれた名前の名刺を差し出して、彼はしばらく考えこんで部屋の広さなどを目測していたが大体の見積りをだして、これでどうですかという。たんすやベッドや家具の移動、書斎の本の移動など、工事以外の人件費がかかることが予定外であったが、その価格が妥当なものか、秋子には見当もつかなかった。

しかしびっくりするような金額でもなかったのでその場で即決した。二、三の業者に当たって見積もりを比べてからきめるという常識も知らないではなかったが、法外な値段でないかぎり、面倒である。これでよしとするべきであろう。前金として半額の費用を請求したときも気持ちよく応じた。やがて正式の見積書が送られてきた。

一週間ほどして斉藤高志はかなりの材木を運び込み、工事にかかった。無口のようである。家具を移動させるときは同業者と思われる職人を連れてきて、てきぱきと仕事にかかった。仕事の合間のお茶を勧めても、時間がもったいないからと持参したペットボトルのお茶をのんで、休憩することはなかった。

その間、トラは金槌を打つ大きな音におびえてしまうので抱いてやったり、戸外に連れ出したりと思わぬところに気をつかったが、せまいマンションの床は一週間ほどの作業で出来上がってしまった。仕上げの掃除がおわって室内を見回した。以前より広々とした感じである。

秋子は満足であった。冬は足元が今までよりは冷たいかもしれない。しかし上等なスリッパを履けばいい。何よりも久しぶりに室内のイメージが変化をしたことがうれしかった。トラのあとについてまわって掃除機を使うことがなくなっただけでもらくである。

口数のすくない斉藤高志は残りの金額を受け取って領収書を差し出すと、「またよろしくお願いします」と帽子を脱いで丁寧にお辞儀をして帰っていった。「イースト」は

彼一人で経営しているようであった。大きな工務店に勤めていたが独立したとのこと、仕事の関係で、臨時に仲間に応援を頼むことはあっても従業員は彼一人、全くの個人経営、黙々となんでもこなさなくてはならない。時折家具の配置などで秋子に質問をするようなことがあっても、冗談や無駄な世間話などすることがないのも気にいった。それよりも自分で選んだ業者によって部屋の模様替えをしたことが何よりも誇らしくうれしかった。すべて夫の意のままであった彼女が、初めてやり遂げたリフォームだったのである。

ほかに何か変えるべき場所はないか、キッチンをオール電化にすることを思いつき斉藤高志に再び依頼した。結露の多い窓を二重にすることを思いつき、斉藤高志に依頼した。電話をすれば彼は二、三日後には確実に現れて彼女の要望にこたえてくれた。ベッドルームの壁のクロスをクリーム色に張り替えた。リビングの壁にそって置かれた古いサイドボードを捨て、上質の木材を使った大ぶりの飾り棚を作りつけてもらった。玄関の下駄箱も重量感のあるものに作り変えた。３ＬＤＫのマンションの室内は、かくして夫が逝って三年後には斉藤高志の手によって新しく改修されていった。どんなに小額の仕事でも彼は必ず前金を請求した。それが当たり前のことと思い、秋子は

子猫のトラを遊び相手に、インテリアの小物にも熱中して退屈することがなかった。一年がすぎた。

それは十一月に入ったばかりの小春日和の、日差しが柔らかい夕暮れ時のことであった。自転車で買い物にでかけ、マンションのエントランスに差し掛かったとき斉藤高志にばったりと出会った。夕陽を背にうけて彼の表情は読み取ることができなかったが、作業服姿の背中をまるめて、秋子を認めると近づいてきた。

「しばらくね、この辺でお仕事？」なつかしさで顔をほころばせた。

「奥さん、金を貸してくれませんか、五十万ほど。資金繰りに困っているんです」唐突に怒ったような口調できりだした。

秋子は一瞬、きょとんとした。――お金を？　五十万？　私が彼に？――沈黙が流れた。

「無理なことはわかっているんです。こんなこと頼める筋合いでないことも。ただどうしても工面できないから一寸言ってみただけです。気にしないでください。ごめんなさい」かれは弱弱しく頭をさげて立ち去ろうとした。

「一寸待って」思わず叫んだ。「待って頂戴。それであなたはその五十万をいつ返してくれるの」。
斉藤高志は驚いたように振り向いた。「貸してくれるんですか」
「五十万なんて大金、手元にあるわけが無いじゃない。でもあなたが差し迫ってどうしても必要で、返してくれる当てがあるのなら、考えてみてもいいわ」
彼の眼に光が宿った。「いまはやりくりが大変ですが、暮れになるとある程度まとまった金が手にはいる予定です。暮れには間違いなく返します」
秋子はすばやく頭をめぐらせた。定期を解約して応接セットを買い換えた残りの余分の金額が通帳に残っていることを思い出したのだ。斉藤高志は誠実な人柄だと常々彼女は信じていた。ただどんな仕事でも前金を要求することで金銭的にはかなり緊迫していることも予想できた。もし彼のこの急場をしのぐ手伝いに自分がなれるのならひと肌ぬいでもいいかなという気になった。
「今すぐにといわれても手元には無いけれど、明日なら銀行でおろしてきてお貸ししてもいいわ。間違いなく返していただくということで」少しばかり遊んでいる私のお金が人のよさそうな斉藤高志の助けになるのならー。親戚や知人でもなくまして身内

でもない彼に、家庭の主婦にとっては大金である五十万を融通することはやはり冒険である。斉藤高志に頼んだ仕事の数々はすでに五、六件に及んでいた。トラブルも無く、付き合いは円満なものであった。全く唐突である彼の申し出でに応じたのも信頼関係があり、彼の役に立てるなら、という善意であったので、軽率だと一笑に付すわけにはいかないだろう。

翌日、秋子は五十万を通帳から引きおろし、斉藤高志に自宅まで来てもらい借用書とひきかえに渡した。

「まさか貸してもらえるとは思っていなかった、奥さんの好意は無駄にしません。暮れには必ず持参します。本当に有難うございました」めったに見せない笑顔で彼は両手で受け取ると何度もお辞儀をして帰っていった。

「お仕事頑張ってね」秋子も笑顔で彼を見送った。

秋子は着古したグレーのコートを捨て、ワインレッドの斬新なデザインのものを新調した。オレンジ系のセーターにカメオのペンダントを奮発した。月に一度は都心のデパートへ出かけ、流行をチェックし、メークアーチストの勧めるままに、高額の化

粧品を常用するようになった。自分の意思で生活の設計をすることの充実感はいままで経験したことのない喜びであった。亡夫の残してくれた預金を今は自由に使えるのである。要するに秋子は脱皮したと言うべきだろう。

師走のあわただしさにまぎれて斉藤高志のことはしばらくの間、頭のかたすみにしかなかった。しかしもちろん五十万という大金の存在を忘れるわけが無い。返済日をはっきりと指定しないで漠然と「年末」としたことのあいまいさを後悔したが彼の人柄を絶対的に信じていたので不安があっても隅に押し込めようとしてきた。

暮れも押し迫った二十八日のことであった。斉藤高志から電話があった。三十日の夕方に届けるという。やはり私の人を見る目は間違っていなかった。ぱっと霧が晴れたような思いで、もうあの五十万は、これからなにがあるかわからないから貯金しておこうときめた。ここ二年あまりの浪費にちかい金の使い方を反省し、元来がけちな秋子は心が痛んでいた。

どんよりとした曇り空の、風の冷たい夕暮れであった。玄関のチャイムがなった。彼だ！どきどきする思いでドアをあけた。斉藤高志の表情はいつものようにはっきり

しなかった。彼はポケットから封筒をとりだした。
「奥さん、ごめんなさい。方々駆けずり回ったけれど五十万は準備できなかった。この中に九万円入っています。今はこれでかんべんしてください。残りは来年一月末までに用意します。借用書を書き換えてきました。本当にごめんなさい」。
九万円返却だと残りは四十一万円か、せめて半分でもかえせなかったのかという情けなさでいっぱいになった。あれほど確約したのに。しかし彼は本当にお金に困っているようで彼女の好意を無視しようなどという悪意は全くないように思える。独立しても期待したように仕事が無いかもしれないし、資金繰りもうまく回転していないだろう。自転車操業とよく言うが、彼の仕事もそれで動いているようだ。残りの金額をあと一ヵ月後に返すといっている。無いものはとれない。待つ以外にないのだ。柄にも無く大声を張り上げて返済をせまったところでむなしいだけだろう。彼女は短い時間にきっぱりと決断していった。
「わかったわ、一月末まで待ちます。お金を都合出来ないのであれば仕方がありません。でも私も豊かな経済状態であなたにお貸ししているわけでないのは、よーくわかってね。あなたを信用して何とか融通したのです。今度は全額、しっかりと返して頂

戴ね」いつもの秋子に似ず、毅然としていった。貸した五十万円を返してもらえるかどうかの瀬戸際なのだ。こちらも必死である。

「本当に申し訳ありません、奥さんのご好意は身に滲みています。一月末までにはなんとか都合をつけます。もう少し待ってください」

彼は心底からすまなそうであった。うわべだけの言動をとれない性格であることを知っていたので秋子も冒険をしたのだ。九万円の現金と、四十一万円の借用書をうけとった。

年が明けた。一人暮らしの秋子でもやはり新年は多忙であった。夫が存命していたころは人並みにおせち料理を作って並べ、お屠蘇を楽しんだものだが、一人ではそんな気にもならない。千葉に住む姉のところに年始にいくぐらいであった。八十歳になる姉は元気そのもので、九〇歳近い義兄と二人で暮らしている。同じ関東でも秋子の住んでいる神奈川の西部と成田に近い千葉では街の雰囲気に格段の相違がある。秋子は私鉄を何度か乗り換えて格安の商店が立ち並ぶ小さな駅でおりた。堤防の無い、一寸雨が降れば氾濫しそうな小川が近くにある姉の家は昭和四〇年代の始めに建てられ

たもので地震にたいするメンテナンスはなされていないという。
「申し訳程度の市の補助金で、すこしぐらい補強したって、震度七クラスがくればペチャンコでしょう。揺れたら直ぐに外に飛び出すという反射神経を鍛えて命だけは確保し、地震でつぶれた後は跡地に仮設住宅を建て、何年かわからないけどたいしたことのない余生を暮らそうと思うのよ。そのために貯金をとっておくつもりよ」
姉なりに考えているのだと感心した。義兄は、どてら姿のままコタツに横すわりになって、秋子のほうに軽く頭を下げただけでテレビに見入っている。会話など成り立ちようも無い姉夫婦の様子をみて秋子は姉の、夫への不満の捌け口になるのではとおそれた。
「しばらく会わない間に随分若返ったわね。なにかいいことでもあるの」カメオのペンダントにチラッと目をやって姉は覗くように秋子をみた。
「まさか」と聞き流したが、ふと、いままで誰にも話していなかった斉藤高志にお金を貸したことを話してみようかという気になった。彼女はさりげなく絶対返してもらえる前提で工事を依頼した職人に五十万円を都合した話をした。
姉の顔が突然くもった。咳き込むようにいった。

「あなたまさかその男に入れ込んでいるわけではないわよね」
「なんて事を、お姉さん、彼はまだ三十代の全くタイプの違う人よ。思い違いもはなはだしいわ」
「縁もゆかりもない、まして義理などないそんな人に、どうして大金を貸すのよ、もしかしたらそのままとんづらするかも知れないじゃない。お金を貸すなんてお金持ちのすることよ。あなたにそんな資格はないし、第一そんなことでお金をなくしたら義雄さんに申し訳が立たないじゃないの」姉はしゃべるにつれて怒りが増長し、しまいには絶叫して今ではあまり話題にも乗らなくなった亡夫の名前さえもちだした。
「わかった、お姉さん、お金はなんとしても今月末に返してもらいます。心配させてごめんなさい。私らしくないことをしたと後悔しているのです。もうこんなことはしないわ、不愉快な気持ちにさせたことほんとうに悪かったわ」
秋子は話したことをしみじみと後悔した。彼女の気持ちを説明することも難しかったし、斉藤高志にたいする思いはもちろん恋などという種類のものではない。ただ彼は本当にお金に困っているのだ。仕事をやりくりする上で資金が思うように動かないのだ。

人助けといえば大げさだが、少しでも役に立てばという全くの善意だった。匿名で被災地に寄付する人もいる。ほそぼそと暮らしている彼女にそんな資格は無いのかもしれないが、彼に貸した動機は全く純粋だったので妙に勘ぐる姉に話したのは間違いであった。早々に話題を変えようとしたが、しばらくの間姉はこだわって彼女の博愛心を理解しようとしなかった。新年にふさわしい話題を、と秋子は飼っているトラ猫のかわいらしい様子を話した。猫好きの姉もつられて近所の猫の話題に移り、秋子はやっとすくわれたような気になった。

一月の終わりは瞬く間にやってきた。今回は秋子も返済の日を、期待をこめて待っていた。月末の夕方、斉藤高志はまたも夕陽を背負ってやってきた。チャイムがなったとき、動悸がするのはなぜだろう。

「奥さん、方々手をつくしたけれど、どうしても都合ができなかった、ここに五万円あります。今日はこれで目をつぶってください。三月にはまとまった金がはいるはずです。三十六万円の借用書です。三月末には是非」

秋子は頭から血が引いていく思いがした。予想しないわけではなかった。彼は最初

から自分のことを、一人暮らしの老女と見くびって、返済する気など無かったのではないか。――私はだまされたのであろうか――。しっかりと斉藤高志をみつめた。いや、にらんだつもりであった。彼は眼をそらしてうつむいた。

「信頼を裏切ってごめんなさい。奥さんは本当にいい人だから私も苦しいのです。どうしてもお金が無いのです。もう少し、三月まで待っていただけませんか」

北風の吹く中、薄っぺらな作業服姿の彼の全身から貧困のわびしさがにじみ出ていた。

ここでありったけの罵声を浴びせたところで、ない金は出てくるわけが無い。建設的な対応とはいえないだろう。わずかばかりの金額でも返しにきただけで、誠意があるとみとめてあげなくてはならないだろう。渦巻く感情を押し殺していった。

「三月は決算期だから少しは融通してくれそうね。残りは三十六万円ね。だめだといってもないものはないのだから、受け入れるより仕方がないでしょう。三月を期待していますよ」

そういわざるを得ない自分が情けなく、一時の温情で彼に善意を示したことを後悔しても今更取り返しがつかない。五万円入りの薄っぺらな封筒を受け取って足元にからみつくトラを抱き上げリビングにひきあげた。

家庭の専業主婦として私のやり方は甘いのだろうか。秋子はくよくよと思いをめぐらした。「施主と業者」というだけの付き合い、何度か家のリフォームを依頼したが「イースト」という会社の資金繰りについても、斉藤高志の家庭についても何一つ知らなかった。それなのに五十万円を融通したのは無謀だったかもしれない。しかし彼は、お金はないけれども本質的にいい人だという確信のようなものが秋子にはあった。くりかえすが一時的にでも窮状がしのげればという同情心が彼女を支えていた。彼女は自分の心底をのぞいて分析し、最初に彼の人柄を気に入って貸すことを決断したからには何があっても後悔せずに（たとえ彼にくれてやるような結果になろうとも）自分を信じてその気持ちを最後まで通そうと思った。すこし気が楽になった。

水ぬるむ三月――。秋子は近所の公民館に絵手紙を習いにいった。七十の手ならいである。絵も文章も始めて書いたが、季節の花に短い言葉をのせて一つのまとまった絵はがきを創作することは想像以上に楽しかった。グループの仲間も出来た。夫の付き合いのなかでしか行動できなかった彼女は七十歳にして自立したのである。

春の彼岸の墓参りも済ませてサイドボードの上の遺影には白菊を飾った。月末がやってきた。三十一日、間違いなく斉藤高志は夕闇にまぎれて玄関に立った。秋子も無言で対峙した。やがていつものようにかれはポケットを探り、薄い封筒をとりだした。この前と同じせりふをくりかえした。

「奥さん、四万円あります。精一杯の金額です。残りは三十二万円、これが今回の借用書です」

彼女の心には悲しみのようなものがひたひたと流れた。驚きも怒りもなかった。やはりそうか、彼は返そうにもお金がないのだ。悪意はないのだ。四万円返却とはなんというなさけないことか。しかしたとえ金額の如何にかかわらず、こうして返却に訪れるということは彼の誠意と思っていいのかもしれない。秋子はかすかな笑みをうかべて封筒の中身をあらため、受け取った。

「それで残りはいつ？」

「四月の半ばすぎにはどうにかなると思います。おそくなってご迷惑をおかけしていると申し訳なくおもっています」

あまり悪びれている様子は無い。むしろないものはないという開き直りのような図太さも感じられる。おやすみなさい、と秋子は静かに言った。

「貸した弱み」というのがあるようだ。貸したけれども相手に返却の能力がなければ返してもらえない。でも斉藤高志は小額でもちゃんと持ってくるではないか。本当に誠意のない人間ならそ知らぬ風で、来たりはしないだろう。少しずつでも積もり積もれば全額になる。それを待つ以外にない。秋子は自分の心をなだめて当分彼のことは深刻に考えないようにした。ストレスはあらゆる病気の原因になるとメディアは繰り返し警告している。夫には申し訳ないけれど一人の自由な人生をもうすこし楽しもうと改めておもった。

斉藤高志から四月末に電話があった。「今月はどうしても都合がつかないけれど来月、五月の末ごろには都合がつくからそれまで待ってください」という。口調には当然秋子は待ってくれるだろうという傲慢さがいつのまにかにじみ出ていた。

「近々に用事があって郷里の鳥取のほうに出かけるのであのお金が必要なの、早く返

して欲しい、他の誰かに借りてでも私のほうはきちっとしてほしい」秋子は哀願口調になった。
「いずれ、なんとかします」電話の挨拶ですませようなんて失礼な、と怒りがこみ上げたが、おさえた。
五月の夕暮れ時――斉藤高志は六万円封筒に入れてきた。返却方法を月賦にしてという約束はした覚えはなかったがその後も、電話で延期を申し出るようなことはあったが、連絡だけは必ずいれて、いつも十万以下の金額を包んできた。
「有限会社イースト」は倒産しているわけではないらしい。一年近くがすぎたころの一〇月には借用書の残金が十四万円になっていた。斉藤高志は十一月、電話で連絡してきた。五万円を封筒に入れて持ってきた。
玄関にでて秋子は斉藤高志の来るのを待っていた。相変わらず、夕日を背負って斉藤高志はひょろ長い姿をみせた。切れ長の涼しい目をしていることに始めて気付いた。五万円入りの茶封筒を受け取ったとき秋子は思わず「どうもありがとう」といった。時々彼に小遣いをもらっているような錯覚にとらわれてうれしかったのだ。
かれはちょっと不審な顔をしたが穏やかに「どういたしまして」と笑顔をみせた。

秋子は全額返済してもらったら、また改めて斉藤高志にお金を融通してもいいかなという気になった。

（２０１２年　９月）